城山山麓の墓所（四）

――先人の跡をしのぶ――

山本　保
（会員・佐伯市池船）

一　関谷善三衛門儀の墓

臼坪区岡の谷墓地の奥に、関谷善左衛門の墓が、静かなたたずまいを見せている。

桐櫨院貫誉宗英居士
　文政六未年三月九日
松操院全誉貞英大姉
　天保九戌年二月十一日

と、側面に夫人の法名も刻み込まれているが、桐（きり）櫨（はぜ）の二字は、彼と切ってもきれない深い関係にある。

内町クラブ前の広場には「諸木橋跡」の石碑が佐伯ロータリークラブによって建立された。

また、その標識板には――諸木橋由来――

「諸木橋とは、藩政時代より昭和初期まで、広小路現在地から向島に架けられた橋の名で、その袂の船着場は木材・木炭・しいたけ原木などの集散地で、諸々の山の幸を遠く大阪方面に船積みされた地にあり、諸木橋と名付けられたもので、その上から眺める船の往き来は、一片の風物詩であった。佐伯ロータリークラブ」

と明示し、周りにはサツキやサザンカが植えられ、「佐伯藩時代屋敷図」の石板も添えられている。

宝暦五年（一七五五）八月八日、第七代藩主毛利高丘は、佐久間儀右衛門を諸木植付奉行に任命し、野山に櫨十万本を植え付け、製蝋事業に着手したが、成績が不良のため中止して、以来四十年余りの歳月が流れた。

寛政六年（一七九四）、第八代藩主毛利高標は、諸木植付所を向島（現在の太平区・佐伯セントラルホテル付

近）に設置し、関谷善左衛門を諸木奉行に登用した。善左衛門は、佐伯文庫本購入のため、長崎へ出張することも多く、道中の筑後地方の木蝋生産に着目し、大阪資本と提携しながら、多量のろうそく生産に力を入れた。

諸木奉行所が内町川向こうにあっては、出勤する役人も不便のために、木造橋を作ったが、佐伯藩としては初めての試みで、所謂第一号の架橋であり、一名国益橋とも呼ばれた。

ちなみに、近くにあった太平橋は、六十九年後の文久元年に、そして池船橋は明治十六年に架橋されている。

諸木とは櫨をはじめ桐・楮（佐伯紙の原料）・桧・杉松・榎など、いろいろな樹木が含まれており、山林署使番文右衛門は三十九年間奉公し、杉苗を育て約二万本を植樹したという記録が残っている。

鶴見町羽出浦・安部弥右衛門氏の名著『ふる里の昔をさぐる』の中に、次のような調書がある。

覚　―櫨苗の補植―

一　櫨苗　六拾四本　羽出浦中分

一　同　三本　同　惣吉分

右の通り丑三月六日受取申し候。尤も去る戌年植え込み候内、損じ候に付、其代りに植直し。

丑三月六日

戌（嘉永三年）、丑（嘉永六年）の頃である。

なお、県下にも、府内藩「櫨楮勘定帳」その他「礪育口伝試百ケ条」、「農家徳益弁書」、「農家益続篇」など、櫨に関する古文書が残っている。そして農・漁民の納税に対する苦労の一端を知り、また、毎年目を楽しませてくれる秋の紅葉も、みな先人の血と汗の努力による結晶であることを知ることができる。

天保十年（一八三九）内町の人々が芳島を開拓し、諸木役所そばに神明社を造営したりして、舟の往来でにぎわっていた内町川も、昭和初期、佐伯海軍航空隊・防備隊の建設に伴い、埋め立てられて、幹線道路に変わってしまった。

終戦後、元航空隊・防備隊跡には二平合板株式会社、津久見税関支署佐伯監視所、興国人絹パルプ佐伯支社、臼杵鉄工佐伯造船所、海上自衛隊佐伯基地分遣隊、門司検疫佐伯出張所などが続々誕生し、その間に佐伯大橋、住吉橋も見事に架橋されて、ついに高度経済成長に向かう昭和四十年、幹線道路は完全に舗装されさらに、国道

三八八号線に昇格した。

地下に眠る諸木（しょぼく）奉行・関谷善左衛門儀の感慨は、いかなるものであろうか。

ただ「諸木橋跡」という標識板のみが、往時をしのばせてくれているにすぎない。

二　今泉元甫の墓

日豊本線城山踏切を越えた臼坪区岡の谷に、今泉家一族の墓地がある。

山水楽寿庵先生之墓

文化五年正月十三日

と彫り込まれた墓の後には、孝子簡謹誌、小倉儒官石川剛謹銘による大きな墓碑銘が、彼の徳をたたえるかのように建てられている。山水という法名は、三義泉と深いつながりを持っているのであろう。

彼は、第八代藩主毛利高標に仕えた侍医であり、庶民の面倒もよくみた、きわめて平民的な医者であった。そのすぐれた医術と人がらは、佐伯藩随一の名医として慕われた。

明和四年（一七六七）から八年、そして天明元・四年、寛政三・十二年と天候不順が続き、干ばつ・洪水等のため、藩内は凶作・飢饉に見舞われた。中洲に造成された城下町は、沖積層の土質（土砂が流水などによって運ばれ、下流に積み重なって出来た土地）のため、井戸を掘っても良質の水には恵まれず、人々は苦労していた。

元甫はその不便さを勘案して、山の麓に三つの井戸をつくった。山際（城下西町）の藩米倉近くに二つ、大手門、藩庁近くにあった家老職斉藤家、簀川家、上級武士山口家隣接場所に一つ、それぞれの試掘が成功し、清水はこんこんと湧出した。

(一)　安　井

元法務局下の井戸には、標識板が建てられている。

国木田独歩の名文章〝豊後の国佐伯〟に「黄昏」（たそがれ）と題して紹介しているこの井戸、その丸い井げたに刻まれているように、安井（あんせい）が正しい呼び名である。

番匠川の下流デルタ、半ば干潟であったところを埋め立てて、城下町としたため、人々は清冽な飲料水に困っていた。これを救うため、藩医今泉元甫私財をもっ

て、城山山麓三か所に井戸を掘って、城下町の人々に提供した。

その第一がこの「安井」、すぐ上段に藩の米倉があったので、「お倉の井戸」と呼んで、朝夕水汲む少女が蝟集していた。独歩の文章の通りであった。

第二は山際小路（現在は片岡邸内）の唖泉（あせん）

第三は西谷小路の甘泉（かんせん）で、人々は今泉元甫の三義井と呼んで、その徳をたたえたという。

今は上水道の普及で、その使用は全く停止されているが、この歴史は貴重である。佐伯市はこれを史跡とし、文化財に指定している。　佐伯市教育委員会

(二)　唖泉

安井から四十㍍余り離れた所（現在・片岡博氏邸内）にある井戸が、唖泉である。

佐伯市教育委員会によって整備された井げたには、藩主毛利高標（四教堂並びに佐伯文庫創設者）命名の「唖泉」という題字と、藩校・四教堂教授松下筑陰の銘文―ナガレル泉、コレニ唖ト題ス。飲ム者ヲシテ唖タラシムルニアラス、モッテ多言ノワザワイヲ戒ム（漢文）―が一しょに、彫り込まれている。

これは、安井に勝るとも、劣らない、重要な歴史的遺産である。

(三)　甘泉

藩士山口家内（現在大手区）につくられた甘泉は、「百戸汲之尚不枯渇」とうたわれ、汲んでも汲んでも尽きない、水量に恵まれた、良質の井戸であった。

現在は、周囲の状況も変わり、ポンプ式用木製のふたなどもおいかぶさっていて、藩政時代の面影は残っていないが、その試掘には、随分苦労したことであろう。

第六代今泉元甫鼎庵の業績

御典医　二十人扶持　御給人格

安永二年（一七七三）十一月米百二石四斗九升八合、銀三十四枚、同百六十五匁、金五千三百疋、藩に献上。

天明元年（一七八一）安井などを造る。

天明七年（一七八七）飢饉につき米百石（壱石百六十目替也）藩に差上。